

2020. 1. 19 第三主日礼拝（教会総会）

創世記 17 : 1-8 「主とともに歩む」

聖書

- 1 さて、アブラムが九十九歳のとき、主はアブラムに現れ、こう言われた。「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ。
- 2 わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に立てる。わたしは、あなたを大いに増やす。」
- 3 アブラムはひれ伏した。神は彼にこう告げられた。
- 4 「これが、あなたと結ぶわたしの契約である。あなたは多くの国民の父となる。
- 5 あなたの名は、もはや、アブラムとは呼ばれない。あなたの名はアブラハムとなる。わたしがあなたを多くの国民の父とするからである。
- 6 わたしは、あなたをますます子孫に富ませ、あなたをいくつもの国民とする。王たちが、あなたから出てくるだろう。
- 7 わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、またあなたの後の子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしは、あなたの神、あなたの後の子孫の神となる。
- 8 わたしは、あなたの寄留の地、カナン全土を、あなたとあなたの後の子孫に永遠の所有として与える。わたしは彼らの神となる。」

はじめに

教会総会の朝を迎えました。今年の教会の歩みを神さまがどのように導いてくださるでしょうか。今年、主が用意してくださった教会の道と一緒に歩んで行きましょう。後の教会総会に備えて、短くみことばに思いを向けます。

1. わたしは全能の神

多くの人は神さまということばは知っていますし、日常の中でも使うことはあります。しかし、人によってそのイメージするものは違うように思いま

す。キリスト教信仰の場合は、聖書が示す神さま像があり、それは単なるイメージではなくリアリティーをもって迫る神さまです。この神さまは数ある神々の中から人間が探し求めて見つけた神ではなく、神さまご自身から人の世界に降りて来てくださり、ご自分を啓示してくださる神です。ですから、聖書には「わたしは〇〇である」というように、神さまの自己紹介が満ちています。そうやって、神さまはご自分のことを人に明らかにしておられるのです。明らかにされた神さまを受けて、私たちはその方をリアルに捉え、共同生活（共なる歩み）が始まるのです。

1節を見ますと、私たちと共に歩んでくださる神さまは、「わたしは全能の神である」と自己紹介しておられます。「全能の神」のことを「エル・シャダイ」と言います。これはどういう意味なのでしょう。全能という何でもできるスーパーマンのように理解するかもしれませんが。確かに聖書には「人にはできないことですが、神にはどんなことでもできます。」(マタイ 19:26)とあります。人間には限界があり、天地を創造することなどできませんから、全能というとき何でもできる神さまが強調されるのは理解できます。しかし、ここでは少し違う意味合いで全能ということが語られています。それは、神さまはご自分の口で語られたことばは必ず実現されるということで、神さまの口から発せられたことばの確かさが強調されているのです。その理由は次に見ますが、約束されたことは必ず実現する、その確かな証拠がクリスマスの出来事にありました。同様に今年、神さまが私たちの教会に与えてくださった年間標語、また個人に与えてくださった年頭聖句が全能の神さまの手によって必ず実現するのです。「エル・シャダイ」の神さまを信じて歩み出しましょう。

2. わたしの前を歩み、全き者であれ

神さまのことばの確かさが「全能」の意味するところであることを述べました。なぜそう言えるのでしょうか。その鍵は創世記 15 章から始まるアブラムの生涯の中に隠されています。

神さまがアブラムに語られた 17 章の契約のことばは、15 章で子孫の繁栄

を約束された内容を深める形になっています。15章で神さまはアブラムを外に連れ出し、「あさ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい。」と言われ、「あなたの子孫は、このようになる。」(15:5)と子孫の繁栄を約束されました。アブラムはそのことばを信じたので、神さまはアブラムを義と認められました。しかし、子孫の繁栄のためには大きな壁がありました。アブラムの妻サライは不妊の女性だったからです。神さまの約束と現実との大きなギャップの中でアブラム夫妻は悩み苦しみます。そして出した結論は、サライの女奴隷であるハガルによってアブラムの子孫を残すということでした。サライのこの提案をアブラムも受け入れ、ハガルによって男の子を設けます。名をイシュマエルとつけました。このときのアブラムは86歳。サライは76歳です。高齢の二人にイシュマエルという世継ぎが与えられたのです。

しかし、このことは神さまの願われる形ではありませんでした。この出来事を機に、神さまはアブラムの生涯から身を隠されました。次に神さまがアブラムに声をかけられたのはアブラムが99歳のときでしたから、実に13年間の沈黙がありました。アブラムはこの間どんな思いだったのでしょうか。苦しい13年間だったと思います。その苦しみを解いてくださったのは、神さまご自身でした。「さて、アブラムが99歳のとき、主はアブラムに現れ、こう言われた。『わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ。』」(1,2節)。

これはアブラムの不信仰に対する挑戦でもあるのです。不妊の女性が子を宿すことなど考えられない中で、神さまへの信仰を後ろに投げ捨て、ハガルによって子孫を設けたことへのチャレンジでした。「わたしは不妊の女からでも子孫を与えることのできる全能の神である。あなたはこのことを信じますか。」という私たちへのチャレンジです。「全き者であれ」と、神さまを信じて歩め！との強い促しであり、そうするなら「あなたを大いに増やす」との約束でした。こうして神さまはアブラムとの間に契約を結ばれ、それを機に、尊い父という意味のアブラムから「多くの国民の父」という意味のアブラムに改名されたのです。

創世記16章はアブラムの最大の汚点と言えるでしょう。だからこそ、「わ

たしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ。」と語られたのです。このことばはとても重いのです。

3. 子孫にまで及ぶ契約

さらに驚くことに、アブラハム（改名後）との契約は彼の代だけの祝福ではありませんでした。「わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、またあなたの後の子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる、わたしは、あなたの神、あなたの後の子孫の神となる。」（7節）。と次の世代への契約でもありました。今ここでアブラハムが結んだ契約は次の世代、そして次の世代へと受け継がれ、子々孫々への祝福となって届けられるということです。このことは、こんにち教会の務めを与る私たち現役世代にとって、大きな意味をもっています。今、私たちが神さまの前に「全き者」となって神さまと契約を結ぶなら、それは次の世代の祝福になるということです。世の中は少子高齢化ということが叫ばれて久しいです。教会もなかなか子どもたちや若者が加わってきません。教会員は徐々に年齢が上がり、いつの間にか一人一人が高齢者の域に入ってきました。将来の展望を描きづらく、先細りの材料ばかりが目につく中で、今私たちが神さまとしっかり契約を結ばなければ、すなわち、「全き者であれ」と言われる神の声に答えなければ将来はないこととなります。しかし、信仰を持ってしっかり答えるなら、次世代にそれは引き継がれていくのです。そういう意味で、現役世代の私たちの応え方いかんで将来が決まるとも言えるわけですから、主の前に信仰の応答をもって出させていただきましょう。

結び

2020年の教会を展望し、神さまの約束のことばを握って歩みましょう。全能の神さまのことばとして信仰を持って受け止め、歩み出そうではありませんか。今日の私たちの信仰の決断を神さまは喜んでくださり、祝福の約束を結んでくださいます。それは今日の私たちだけではなく、次の世代にまで及ぶ大切な約束となるのです。だから、今信じて歩み出すことが大切なのです。